
Catch me

幸恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C a t c h m e

【コード】

N 6 0 1 7 M

【作者名】

幸恵

【あらすじ】

志保が突然目の前から消えた。色を失って初めて気づいた自分の気持ち。偶然の再会はあるのか？
新志です。

12/9 話カットしました。詳しくは後ほどご報告させていただきます。

空っぽ（前書き）

ありきたりな設定ですみません。新連載です！

どうも、幸恵です。

何か新しくシリアス？なのを書きたくて、投稿させていただきました。

設定が本当にありきたりですが、おもしろい小説になるように頑張ります。

最初は短いですが、どうぞです。

空っぽ

掴みたいのに、
抱きしめたいのに、
アイツは逃げていく。

いつもそうだ。

傍に置いておきたかった。
けど、そう思ってたのは俺ばっか。

結局、なんも伝えられなかった。

なあ…俺、オメーのことが好きなんだ。

黒板を見る目も虚ろになっていく……眠い。

授業なんてうわのそら。

高校もあれから、何となくつまらなくなった。
毎日の生活が、時間が、俺を取り残して進んでいる。

机にのめっていた身体を起こす。

窓に視線を移すと、真っ青な空が広がっていた。

果てしなく広がっている空の下にアイツはいて。
地球上のどこかには必ずいるのに。

運命なんて一億万分の一。

それなら、俺達が再び出会うことはないのか？

宮野…一体オメーはどこにいったよ？

空っぽ（後書き）

本当に短かったです。

何かクサイなあ…と苦笑しています。

次回もよろしくお願いします。

無気力・脱力

『キンコーンカンコーン』文字通りチャイムが鳴った。
一日の終了の合図。

やっと終わったかと息を吐く。
だらけた体。自分の脱力を改めて実感する。
毎日がこんなかんじだ。
自分が何の為にこんな生活をしているのかすらわからない。

ヤバイよな、俺。

皆の前では出来るだけ普通で。
こんな脆い俺は、絶対に出したりしない。

靴を持つと、向こうから太陽みたいな蘭がやって来る。周りにパツと花が咲くように。
多分コイツだけは騙しきれてないんだと思う。

「新一！一緒に帰らない？」

気を遣ってくれてるのがバレバレで、つかわせている自分が情けなくなる。

蘭の中で俺は、今でも『好き』の対象なのだろうか。

「蘭、ありがとな。けど今日用事あつから」

蘭の表情が曇る。それでもすぐに回復しようとするが、ダメみたいだ。

…宮野は一度も才を崩すことはなかった。だから余計心配だった。心配かけまいとして利用するポーカーフェイスは、全くの逆効果。自分を出してくれる、わかりやすい蘭の方が楽なのかもしれない。それでも、俺は宮野が

「そつか…用事があるんだ…じゃあまた今度…ね…」

「ああ、また今度な」

俺は優しくほほ笑んでみせた。心理とは裏腹ながらできるのも、コナンの時の腕なのか。

「……バイバイ……」

「…じゃあな」

別れの言葉。蘭が見透かしていたような目をしていた。

蘭は教室から出て行った。

最後の目は、寂しく潤んでいた。

その瞳で思い出すのも、やっぱり宮野で。

よくあんな瞳をしたな、なんて。

ついさっきまで話していたのは、蘭なのに。

空想の中を何度も追ってくる。

けど、
現れるのは頭ん中だけで、
宮野志保は……隣にいない。

アイツが消えたのは、元の姿に戻って一ヶ月後。

博士ん家に行つて見つけた置き手紙。

お礼の言葉だけが書かれていた。自分がこれから何をするのか、未来のことは何一つなかった。

荷物もごっそり消えていて。残っていたのは、愛用のパソコン一台だった。

地下の研究室で、ポツリと残されたパソコンを見ると、宮野の姿が浮かんでくる。

泣いたのは、博士。

俺は、ただ黙つたまんま。

涙も出ないくらいの衝撃と哀しみだったのだろうか。

哀しみを表に出さないまま、今の自分が続いている。その代わりに襲ってくるのは、日常への脱力や無力感で。

あれから、一ヶ月ちよつとか。

唯一俺の変化に気づいているのは蘭くらいだ。

博士は俺にまで気が回らねーから。少し…痩せた。

今でも俺は探してる。宮野志保を。

『探偵』という職業をつかって、依頼人に会う度に聞き込みをしている。

まだ居場所はわからねーけど。

警察に頼めば『失踪』になっちまうから、頼めないでいる。

失踪になったら、俺の心が折れそうだから。

アイツは家を出て何をするつもりだったんだろう。

家族や身よりもいなくて、一人になって、何を？

みんな、悲しんでんだよ。

宮野のバカヤロ。

無気力・脱力（後書き）

2話目です。

駄作ながら、お気に入り登録していただいた方、ありがとうございます。
ます。

まだまだ意味不明が多いですが、次回もよろしくお願いします。

題名は珍しく英語です。「Catch me」はそのまま「私をつかまえて」っていう意味です。なんか、カツコイイと思ったので…

他の連載も、執筆頑張っていますが、なかなか進みません。更新できるところにがんばります。

家にある推理小説片っ端から読み返しています。

長文ですみません。

考えてるのは誰？

つまらなそうな顔ばかり。

辛い顔ばかり。

最近は、いつもそう。

私には全部お見通しなのに、隠そうとする新一が嫌い。

新一がそんなふうになったのは、帰って来てから一ヶ月経ったくらいだった。

何がどうしたの？

一体新一に何があったの？

私だって力になりたいよ。

「蘭？らん？」

視界に園子の顔が入った。

「えっ」

「どうしたの？ボーンとこちやっつておれよ」

いけない、またやっちゃった。

下校中。園子はさっきから話を振っていたらしい。

「ごめん…ごめんね」

「そんなに謝らなくていいって！」

園子は、私の顔をじっと見つめてきた。さすがにたじろく私。

「な、なに？」

「蘭…どうしたの？最近おかしいよ？」

おかしい？

おかしいのは、新一の方だよ。

園子がそう感じたのは、私が暗くなってるから。

思えば、黙ったままのことも多い気がする。

私まで沈んでどうするの。

「大丈夫だよ。…ただ……」

「…ただ？」

「不安なの……新一には大事な人がいる気がして……」

別の人のことをずっと考えてる、新一は。

「どーいう意味よ？」

「新一には好きな人がいる…ってこと」

「ウソ！それ本当！？」

「多分…勘で」

「ナイナイ、大丈夫だってー。あんな蘭ゾッコンだった男が…。大丈夫だよ！蘭の考えすぎ！」

園子は私の背中を叩いて元気づけてくれる。

「そう、だね…」

笑顔できてるかな？

園子は本気で、そう思ってる。

新一は私のことが好きだって。

けど私にはわかるから。

園子には悪いけど、幼なじみの新一のことは、私の方が知っている。

私たちの間に気まずい空気が漂った。…だから、同意した。

ふと隣を見ると、ショーウィンドーに私の顔が映る。

萎んだ顔…もうやだ。

「っ…」

私は瞬時に後ろを見た。

「蘭、どしたの？」

確かに今見えたの。

ウィンドーに映るあの子が。歩く姿が。

赤みがかかった茶髪

哀ちゃん…？

考えてるのは誰？（後書き）

3話目で志保ちゃん出てきました。新一と会うのはもうちょっと後の予定です。

お気に入り登録していただいた方、ありがとうございます。

課題やら部活やら猛暑やらで大変な夏休みですが、頑張ります。

会話が多くて、中身が薄かったです。次回もよろしく願います。

隣の男

はあ……気分が浮かない。

もう下校していい時間。

けど、椅子から立ち上がる気力はなくて、
ずっと座り続けたまま。

数日前見た、哀ちゃんに似た女性。
哀ちゃんなわけなのに。
何故か頭から離れなくて。

綺麗だったから……？
不思議なオーラが漂ってたから……？
哀ちゃんに似てたから……？

一瞬だけだった。
すぐ通りから消えてしまったから。
けど、これだけは確実。
『男の人と歩いてた』

「どーした、蘭」
「……へ……」

「帰んねえのか？」

前にいる新一は、心配そうな目をして。心配なのは、あなたのほうだよ。

「…う、うん！あと帰るよ。新一…それよりさ、」

聞いてみようかな。

お隣りさんだったから、ひよっとしたら知ってるかも。

「なんだよ？」

「哀ちゃんって、お姉ちゃんいる？」

……あ……

「いねえよ。どうしてだ？」

今、ほんの少し……顔が怯んだ。動揺した。僅かなの。だけど分かった。

「蘭、もしかして宮野を見たのか！？」

「えっ」

新一の激しい様子に、私は驚いた。ううん、そうじゃなくて…

「宮野って誰？」

「あ」

完全に”しまった”って顔。口を手で隠して、私から視線を外す新一。

「宮野さんってだれ？」

「あ、いや…なんでもねえよ」

悲しそうな表情。目が切ない。

「教えて。哀ちゃんに似てるの？宮野さんって」

別に恐ろしく問い詰めるつもりはないよ。

ただ、力になりたいから。

新一はしばらく黙ったままだったけど、決心したのか、話し始めた。それでも、目は合わせてくれなかった。

「ああ。前、事件と一緒に手がけたことあるヤツなんだ」

「そっか」

そっか、嘘なんだ。

分かるよ、新一を見てれば。

それ以上は追及しないから。安心して。

「その…宮野さん？この前、米花町の一日市通りで見かけたよ」

新一の目がでっかく開く。口はポツカリ、手はわなわな奮えて。

「本当か？本当に宮野か！？」

私の両腕をがちり掴んで揺らす。何をそんなに興奮してるの？

「赤みがかかった茶髪の美人な人だったから、よく覚えてる。哀ちやんに似てたよ……」

「そうか。宮野だ…！蘭！ありがとな！」

新一は私への手を解いて、猛スピードで教室から出て行ってしまった。

曇りのない笑顔だったな。

あんなに興奮して。

私…何もお礼言われるようなことしてないのに。

新一の瞳に映ってる人、

それって宮野さんのことなんだね。

ごめん、新一。

まだ言っていないことある。

どうしても口が躊躇したの。

結局、一人で帰ることになった私。
真つすぐ家には行きたくなくて、本屋に立ち寄ることにした。

参考書を見てたけど、思わず近くにあったミステリー小説手に取る。

新一…好きだったなあ……

頭の中に、新一の顔が浮かんできて、顔が綻ぶ。

失恋したんだっけ、わたし。

涙は枯れたのかな。

何故かこぼれない。

覚悟してからだ。きっと。

前から新一には好きな人がいるって知ってた。

傷心に浸るわたし……の隣から聞こえる声。

「あれ、毛利の姉ちゃんやないかい」

服部君…？

隣の男（後書き）

まだまだ志保ちゃん出てきません！すみません。

蘭っていい子だなあって毎回思います。

困ったことがあると、すぐに服部を使ってしまいます。大変申し訳ないです。

というか、志保ちゃんがいたことを教えるの、もっと後の予定だったのですが……知らずのうちに、早くなりました。

次回もよろしくお願いします。

違いたくて（志保）（前書き）

ちょっと意味がわからない上、短いです。

逢いたくて（志保）

私は強くなれただろうか

日々を過ごしていく中で、感じてしまつこと。

新しい世界に飛び立ちたくて、勝手に消えた自分。
後悔は……してない。

ただ、逢いたくなるの。

博士には悪いことをした。
でも、変わりたかつたの。
独りでも生きられることを証明したかつた。

工藤君に逢いたい

ただ、それだけ。

忘れ物をしたような気持ちを、すっきりさせたくて。

私に会う勇氣はない、資格もない。

街に来て、そっと工藤君の姿だけ見て、そっと帰る。

きつと……元に戻れた幸せ、蘭さんと居られる幸せを噛み締めてるはず。

今日で何日目？

もう夕方、そろそろ日も暮れる。実は今日で終わり。

実は今日で終わりなの。

見られなくても、今日で終わり。

数日間、この馬鹿な張り込みに痺れを切らした、…相棒の命令。

だめだった…そう嘆いた時だったから…

だから…驚いた。

工藤君が向こうから走って来るのを見た時は。

誰かを探しているように、辺りをキョロキョロ見回して。

久しぶり…変わってない。

心の中が温かい桃色に染まっっていく。

誰を探している？

蘭さん…？私…？

そんなわけないのに。

見つかつてはいけない私は、路地に隠れた。

彼の姿が私の視界から消えたのを確認し、安心すると、胸のポケットに入っている一枚の写真を取り出した。

写真には、楽しく笑っている工藤君と私がいる。

前に…戻った時に…博士が撮ったのだ。

この写真は、私のお守り。いつも持ち歩いている。

これを見ると、無性に気分が明るくなれる。同時に、寂しくしてくれる代物。

狭い路地で一人写真を眺める私は、ただの孤独な女。

「そこで何やってんだよ」

懐かしい声に振り向けば、変わらない彼がいる。

違いたくて（志保）（後書き）

すみませんでした。

上手くまとめられませんでした。

次回もよろしく願います。

逢いたくて(新一)

蘭の言葉を聞いて、俺はもう無我夢中だった。教室を飛び出して、宮野の所へ。

『哀ちゃんってお姉ちゃんいるの？』
灰原が大きくなったわけだから、生き写しなのは当たり前。宮野みたいなヤツは、いろんな意味で稀だ。
見間違えるはずがねえんだ。

今すぐにでも逢いたい

怒るよりも、何よりも、
まず、抱きしめたい。

息は切れて、とても弾んでいる。不思議と疲れは感じなかった。

蘭が見た米花町のショーウィンドーの近くをぐるぐる回って、
今気づいた。

今はどこにいたりとか…、そんな情報は一つもない。
そう…見ただけで。

今はいないのかもしれない。

いや、その確率の方が高い。

それでも…、探してみなきゃわかんねえから。探偵は、最後の最後の確率まで追い求めるもんだろ、宮野。

米花町を走りに走って、商店街も何周もしたけれど、アイツはいなかった。

どこいんだよ。

「ハハッ…」

なんかバカみてえだ。自分が可笑しくなって、笑ってみる。

その笑いもしばらくして消えていく。

宮野の髪が、路地から少しだけ見えた。

「みやの…」

心臓を掴まれるくらいの驚きと喜びが、俺を襲う。
車が流れていても、気にしなかった。ただ一直線に走った。クラクシヨンが背中越しに聞こえた。

傍まで寄って、当の人物だということはすぐにわかった。近づいて、黙ってみる時もなく、俺はすぐに声をかけた。

「そこで何やってんだよ」

宮野は振り向いた。

ああ、やっぱり宮野だ。

全然変わってない。顔も姿も雰囲気も……。

正直嬉しかった。消えてからアイツが変わってしまったらどうしようかと。ずっと考えてた。

…だから傍に置いておきたかった。

俺ってこんなに束縛すごいヤツだったんだ。

「工藤君……どうして」

宮野が言い終わらないうちに、俺は抱きしめた。

「えっ……ちょっと……」

戸惑う宮野は、俺の思考をぐちゃぐちゃに壊していく。胸の中にあるコイツの匂いが、俺の口を解いた。

「つかまえた……」

「…え……」

「好きなんだ」

ただ、一言。

ずっとオメーに逢いたかった。
ずっと伝えたかった。

好きなんだ。

違いたくて(新一)(後書き)

10話くらいで完結させようかしら、なんて思ってます。かなりの駄目文ですがお許しください。

というか、彼のとなり…一ヶ月ほど更新しておりません。

部活が忙しくて……けど、頑張って更新させますので、お待ちくださいー！

次回もよろしく願います。

安らぎの香り

腕の中の温もりに、ただ安心してた。遠くに、見えない遥かなところ にいた宮野は腕の中。距離なんて数ミリしかない。

今までの脱力が嘘みてーだ。気分が暖かくなっていく。強張らせた筋肉が、解けていくように。

『想いを伝える』

その行動は確実に、俺をスッキリさせた。

伝えなかった想い。それを聞いて、コイツはどう思ってたんだ？

宮野は黙り込んでいた。今の俺にはそれが有り難いんだが。

荒れた吐息だけが聞こえたと思ってたなら、落ち着いた声が耳を掠めた。

「…ありがとう…」

どういう意味なんだよ。

宮野の身体をゆっくりと離し、宮野の顔を見つめる。けど宮野は目を合わせなかった。哀しそうに俯くだけで。

「それって…」

「励ましてくれるなんて、私って迷惑かけてばかりね」

言いかけてやめた。俺の声は宮野に掻き消されて。

通じてない。俺の気持ちを誤解してるのか。それとも…、気づかないフリをしてるのか。

「あのな…」

言いたいことも結構あったつもりだし。責めたいこともあったのによ…上手く思考は回らないもんだ。

宮野はポケットから取り出した腕時計をちらりと見ると、小さな溜め息をついた。

「じゃあ、もう時間だから」

「ちよっ…まだ会って間もねーのに！」

焦る俺を見て、宮野はクスリと笑った。

「また…今度ね…」

その言葉を聞いたら、もう二度と会えなくなる気がした。

あ、また嫌な予感だ。

最近よく出るヤツだ。

まあ、人間なんて一度会えば、二度目なんか簡単なもんだよな。

掴んだ宮野の腕をすりと解く。

宮野は塞いでいた路地から出て、道路を横切って行った。一台の黒い車の助手席に乗り込む宮野。

助手席…？

誰か運転する奴がいるのか？

謎は頭を過ぎったが、今は差ほど気にしない。聞きたかったことも抜きにしたくせに。

…逢えた喜びが断然勝ったからだと思う。

惜しかったのは、アイツとの時間が短かったこと。

あの時、宮野を止めてりゃ良かったか？

幸せな気分になりながら、俺は路地を出た。いつもと変わらない通りを前に、俺だけ夢うつつ。

走り去る車のミラーに映る運転手は……男だったとも知らずに。

安らぎの香り（後書き）

なんか短いし、出逢いがあったり終わりました。すみません。自分でも理解不能ですが、シリアス実を帯びていて嬉しいです。しかし、事態によって方向性が変わるかもです。

次回もよろしくお願いします。

逃れられない(前書き)

短いです。

逃れられない

「工藤…新一か？」

相棒がバックミラーを見ながら言った。

「……………」

志保は黙ったままだった。思考は別の方に向いていた。相棒は返答のないことを了承しながら、車を走らせた。

今は喋れなかった。

そう、心がぐちゃぐちゃに入り混じっている。

会えてよかった

会えなきゃよかった

逃れられない。彼に出会えば、もう…二度と。

貴方から離れることにどれだけ苦労したか知れない。

なのに…なのに、今さらフォローなんていらぬ。励ましの冗談な

んて欲しくない。

「好きだ」なんて。

ひどい、あなたは酷いわ。

バカよね、私って。

志保は自嘲の笑みを浮かべた。都合の悪いことは何でも新一のせいにしてきた、いつも。それを新一は受け止めてくれた。

好きを飛び越えて、愛してる。

この気持ちは、新一から離れていても、変わることはなかった。揺るぎないものだった。

膝に置いていた手をぎゅっと握りしめる。目線は、流れる町並みにある。

もう心は捕らえられていた。

頭にあるのは、工藤新一だけだった。

結局…と志保は思った。

結局、何一つ彼は、私の中から離れることかはなかった。

ただ、会わなきゃいい話。

でも、もう無理。彼と言葉を交わしてしまった、眼を見てしまった、抱きしめられてしまった。

もう逃れることはできない。

志保のすぐ隣で、相棒は目を細めて窓を開けた。

逃れられない（後書き）

この小説、500文字前後なのを覚悟してもらわなければなりません……；

自分でも書いててフワフワです。そのうち相棒と志保と新一の三角関係になるように、ルーズですが、真相を書いていきたいと思えます。

次回もよろしくお願いします。

哀しき本音

蘭は一步踏み出して、また一步下がった。躊躇をし過ぎて、さっきからこれの繰り返し。

もう…！

蘭は、心の中の自分に葛を入れると、新一の方へと歩み出した。クラスメートの男子と楽しそうに会話していた新一に、蘭は声をかけた。

「しっ、新一！」

新一は蘭に向くと、いつもの変わらない顔で、「なんだ？」と聞く。そこには以前のような雰囲気はない。

周りを取り囲んでいた男子は、蘭の姿を見ると、にんまりと笑った。

「聞きたいことがあるの」

「聞きたいことか？」

「うん」

「工藤行ってこいよ、奥さんのお呼び出しなんだからよ」

男子達はいつものように二人を茶化した。

ああ、昔だったら顔を赤らめて否定ができたのに。

今は…そんな気分ではなかった。新一も蘭も、お互いの心の中でモヤモヤした物が生まれるのを感じた。

多少顔に出た二人だったが、クラスメートが気づきはしない。

「…おお、じゃあ。行ってくっから」

新一は引き攣った表情と声で返事をした。その動作に、蘭は胸がチクリと痛んだ。

蘭の話したいこと、漂う空気によって、静かな所がいいと察知した新一は、生徒会室へ蘭を連れて来た。

次の時間の授業が始まることを、両方が知っていたが、二人とも何も言わなかった。

「何で生徒会室なの？」

「ここなら静かだろ」

そっか、と蘭は笑った。締め切られた音楽室は、新一と蘭のふたりつきり。

蘭は幼なじみに、胸が高鳴っていた。

このバクバクが聞こえなければいいのに。バカだなあと思うと、蘭は頭をふるふる振った。

「この前……宮野さんと会えた？」

「え」

新一は身体がびくつと反応した。この切り出しには、恐れをなしていた。からかわれたあの時、申し訳ない、反省の念が現れたのを、自覚していた。

また……『あの時』と同じ。

「ああ、会えたよ」

そう言うのがやっと。

自分が蘭にしていること、頭のどっかでは分かっていた。

どうして『宮野』の名前が出るのが怖いのか。

どうして蘭から逃げたくなるのか。目を見て話したくないのか。

すべて罪悪感から生まれたもの。

新一は視線を落として、口角を上げた。これなら笑っているように、蘭に映るかもしれない。

「そっか、よかった！」

蘭は努めて明るく言った。
しかし弾けそうな気持ちは、パシンと音を立てて割れていった。途
端に沈んだ口調で、

「…だからだね、」

と呟いた。

「…なにがだ…？」

「新一、笑ってる」

わらってる？オレが？

「前はどこか上の空。いつもどこか遠くを見てて、いつも無気力そ
うだった。みんなに見せる笑顔も、ぜんぶ嘘…：作り笑い。

ねえ、新一…知ってた？隠されることのほうが嫌なんだよ」

新一は冷たい水を体中にかけられた気分だった。

新一も弾ける、弾ける。

本当は気づいてたんだ。

『新一がだーい好き！』

あれは聞かなかつたふり。

蘭の想いも知らないふり。

けど、そんなのだめだ。

自分の気持ちに……嘘はつけない。

「俺は、宮野が好きだ」

蘭は涙ぐんだ瞳で、静かに笑った。

哀しき本音（後書き）

急展開でしたが、ご了承ください。10話以内はいよいよ無理にな
ってまいりました。20話以内には…

駄文で毎度毎度すみません。

蘭ちゃんにはいい子らしく身を引いていただきます。感謝です。
次回もよろしく願います。

量りきれないもの

はつきりと分かった。

周りが色を失って、モノクロに色褪せていくことに。

真実を教えて

わたしが言い出したこと。

覚悟なんて、だいぶ前から出来てたよね？けど、頭ってそんな簡単な構造じゃないらしい。

分かりきったつもり。

“つもり”なんて百倍楽だ。

理解して十分苦しんだと思っていたけど、

口から声から、新一から聞くなんて、比べられないほど。胸に突き刺さる棘。

『宮野が好きだ』

新一は数分黙っていた。

涙を流す私を、ただすまなそうに見ていた。

「そっか…！」

力の限り明るく。

許せない怒りの気持ちは、悲しみ果てに萎んでゆく。

あれだけ待たせておいて、結局は私の知らない人を好きだなんて、身の程知らずなのは、わかってるけど。

「すまねえ、蘭…」

可哀相な顔をするのは、私で十分だよ。

「俺、蘭に話してねーこといっぱいあんだよ」

今の重大な告白以外にも？

新一を恐る恐る見上げれば、ごくりと唾を呑む音。
私はまた俯くと、目を綴じた。

「あのね…」

人にはそれぞれ頭の量りがある。新一の話す荷物を、私の量りに乗せてしまつては、壊れてしまう。それぐらい重いものだった。

頭の中の前提を全て覆されたのだから。

私は強くならなくてはいけない。強く……つよく……

こぼれ落ちそうになる涙を拭くと、上を見た。

「ありがとう、新一……」

新一は辛そうに顔をしかめた。私のことを気遣つてるから、良心が痛むんでしょ……？

「宮野さんが好きな気持ちはわかったよ……ありがとう」

「じゅめん……」

「これからは新一の恋のっ……応援するから……」

「らん……」

「じゃあ、もうひとつ。最後に意地悪させて」

最後に引き下がるために、意地悪させて。小さくとも、仕返しさせてよ。

「志保さん……街で男の人と歩いていたよ」

軽い気持ちだったんだ。

すぐに『そんなことか』って笑い飛ばすって、勝手に。

けど、新一は目を見開いて。
身体を震わせて。

「マジかよ……」

量りきれないもの（後書き）

今話で蘭ちゃんメイン終了です。平次が出て来たんですけど、結果的に話に入ってませんでした…

次回もよろしくお願いします。

相棒という名

コンクリートの囲いの中。

小さなソファアールが後ろにひとつ。小さな窓が頭上にひとつ。そこから漏れるのは、薄い月明かりだけ。

デスクの上にはパソコン。回りには膨大な資料。

殺風景と言うべきか、簡素と言うべきか。そんなところで私は暮らしている。

椅子に座った途端、心の疲労が溢れ出し、デスクの上になだれた。『相棒』の前では、何一つ変わらず平然としていなくてはならない。……だから……？

違う。

原因は、彼だ。

工藤君だ。

まだ身体には熱が籠っている。彼の腕の感触が残っている。

久しぶりに人肌に触れた。匂いも、あの優しい笑みも、何もかも工藤君のままだった。

今すぐこの囲いを飛び出したら、あの温かさに、優しさに縋れるの
だろうか。

なぜ？

ここでの暮らしに、不自由は何一つないのに。

逃げ出したい、元の生活に戻りたい。

胸の蟠りは増大してゆく。

ああ、そうなの。欲しいのは、
工藤君

「はあ
」

悪い考えを追い出すために、息をひとつ吐く。

『新しいセカイに飛び込みたくて』

そう、そんなの立て前だから。
真実は私しか知らない。

ここにきて。

なのに “いまさら”？

筋が通らない。

トントン

ドアを叩く音がする。

「いいか？」

後ろから聞こえる声には目もやらず、ただ返事だけをした。

「…ええ…」

今はひとりにしてほしかったけど。私の『相棒』とは、特に会いたくなかったけど。

「電気も点けないでどうしたんだよ」

その声はわざとらしい。

本当は私の胸の内を見抜いているくせに。

「何か用？」

「……いや、別に……」

ひとつふたつ、ゆっくりと言うと、相棒は後ろのソファに腰を下ろした。

用がないなら出てってよ

そんな言葉をかけるわけにもいかず、静かな時が流れる。

『静か』というほど居心地のよいものではないけど。

「……昨日はありがとう」

「何がだ？」

「連れ出してくれて」

一文一文の短かな会話の繰り返し。

「……楽しかったか？」

「……問題が発生したわ」

ほら、何もかも知ってる。
私の心を見透かしてる。
だから、何も驚かず、何も聞かず。

「今日も丸ごと休んじまったな」

若いのに低い声の相棒。話を転換してくれて、ほっとした。

椅子を引いて、私は彼の瞳を見る。

「そうね　ごめんなさい」

相棒はハハと笑った。
何が可笑しいのかは分からなかったけど。

「明日からは…きちんと働くから」

「俺も頑張らなきゃな」

相手は苦笑いする。なにを？

「お前の相棒として」

……あいぼう

自分の心の中では何度か口ずさんでいた。でも向こうから改めて言われると、どこかつつかえる。

目の前の人に視線を送ると、彼は私から視線を外した。

探っているのだ。

雰囲気は切なく感じたのは、きっと気のせい。

立ち上がって、後ろの相棒をすっと抱きしめた。

彼の腕が私の背中に回った。

早く朝が来ればいいのに。

相棒という名(後書き)

最後の方、R15を漂わせてしまいましたが、私はR15を含む小説は書きませんので、この小説にも出てきません。

今回志保ちゃんらしくなかったような気が……駄目だししてやってください。

話があまり進まない上、前々回と似た内容で、申し訳ないです。

新一と志保ちゃんの絡み。そろそろ入れたいなあ……。

次回もよろしくお願いします。

そこにはいない

汗が渴く。水が体内から出ていく。喉仏をこくりと鳴らす。驚くほどの衝撃を受け、握りしめた拳が奮えた。

蘭は自分がまずいことを言ったと自負してか、俺をじっと見つめていた。

「うめ…」

「…っ！」

台詞の最後を聞かないまま、俺は走り出した。行く先は決まっている。

というか、彼女と会うルートはそこしかない。

以前、偶然の再会を果たした通りへと……俺の脚は絶え間無く動いていた。

揺れるきれいな茶髪も、そこにはなく、ただ、車と人が行き交う通りでしかなかった。

朝がきた。隣には『相棒』がいた。

私の身体には毛布がかけられていたのに、彼の身体だけは無防備に。

相手はまだ目を綴じていて、私は静かに毛布を出す。

彼は傍にいた…。

ずっと…傍にいた。

何も言わない、彼に、私は小さな安心感を覚えている。

服の上にいつもの白衣を着ると、パソコンをいじり始めた。

もそつと後ろで音がした。目線だけを斜めうしろに移す。

「…おはよ」

「ああ…？おはよ」

寝ぼけた声が聞こえる。

どこかの誰かさんと、重なる。

「朝からご苦労なもんだな」

「…何かに打ち込みたくて」

考えるのは、苦しい。

苦しいことから、逃げたい。

何か体でも動かせば、考えなくて済むだろう。

浅はかなことだとはわかっているも。

ああ、パソコンをいじっていれば、安心する。

昔から馴染みがあるからとか、そんな理由じゃなくて。

“ここ”にいる。生きてる。存在している。…していいんだ。

そう思えるの。

「…いつも逃げんのか？」

「え…？」

「お前はいつも逃げてばっかだな」

私は背後の相棒に、目玉だけ動かし、またデスクトップに戻す。

悔しかったがために、唇をきゅっと噛む。

……『逃げてばっか』

黙ってよ。

事実だった。隠すことなどできない、事実だった。

……だから……

彼にも言われた。

『逃げんなよ、灰原。自分の運命から逃げんじゃねえぞ……』

もう一度、耳元で囁いてよ。あなたの声で、聞きたい。

「逃げなかったら、運命は変えられるの？」

「……ああ、わからない。少なくとも、煩わしい後悔なんか残らないはずだ」

それなら、逃げない。

何度目の正直？

きつと、寝起きだったために、こんな決断をしてしまった。

言い訳をひとつして、

データを記録したUSBメモリを外し、ポケットに入れると、私は自室を出た。

そこにはいない（後書き）

驚くほど短くまとまってしまいました。広い心で見teやって頂けると、嬉しく思います。

次の次？くらいには二人を出会わせてあげようかと。

次回もよろしくお願いします。

衝動は雨のなかで

身体が熱かった。

怒りか、興奮か、走ったせいか……宮野せいカ。

『落ち着け』

言い聞かせてはいるが、恋心という衝動から勝てない。

17にして、初めてそんな気持ち悟った。

ごくふつうな生活をしているだけだ。けれど、宮野という名を聞けば、衝動が俺を掻き乱す。

あの、寂しそうに笑う顔が頭に浮かんでは弾けてゆく。この前会った時、腕に抱く宮野の感触。

甘かった。簡単に楽に会えるなんて考え、甘かった。

通りの壁によっかかり、空を見上げる。日は落ち、厚い雲が覆っていた。さっきまでは晴れていたのだが。

ふいに、宮野が消えた日を思い出す。無我夢中で探し回って。そして疲れ果てた末に、アイツの気持ちを考えた。

なぜ、いなくなったのか。

どんな理由で、どんな気持ちで、どんな表情かおで…

雨が滴り始め、俺は歩き出した。冷えてきた足を、家の方向に運ぶ。

蘭はどうした？

また、置き去りにしちゃったな…。

濡れることも気にせず、ただ歩く。傘をさし、街行く人々は、俺に不思議そうな視線を流してゆく。

臆することはない、という自信とか、そんなんじゃない。そこまで頭が回らないんだ。

男って誰だよ？

またどこにいるのかわからなくなった宮野に呼びかける。

恋人でもない俺が言えることじゃねーけど。

今すぐ会いたい

「……………宮野」

俯きがちな心に光が射したように。

クールな蒼い瞳と、白い肌と、赤みがかかった茶髪のウェーブ。

『工藤』と書かれた表札。

門の柵に寄り掛かったその人物は、俺が名前を呼ぶと起き上がった。

俺と同じで、雨に濡れていた。

衝動は雨のなかで（後書き）

…短いですね。

相棒と新一との絡みを入れない、とただ願う幸恵でした。

当初10話以内と言っていましたが、延びますね。笑

次回もよろしくお願いします。

止めることができるなら(前書き)

」止めることができるなら「12月9日改正しました。

止めることができるなら

濡れた髪や身体が、
やけに冷たく、切ない。

そう感じるのも、俺がコイツを抱きしめてるからで。

宮野は何も言わずに、俺の胸に顔を埋めたままだった。

この時、時間が止まったかと思った。雨音も耳に入らない。

宮野に触れただけで、俺には手足の感覚が戻った気がする。

「…わたし、言いたいことがあって……」

「言いたいこと、か？」

宮野のことはばで現実に引き戻された。言いたいこと。

先ほどとは違い、はっきりと聞こえる雨の音。辛うじて届く宮野の
声。

なぜあなたは、私を抱きしめるの？
優しいから。

その優しさは、私を苦しめる。
私には重いのに。

惹かれてゆくスピードは恐ろしく加速するのに。

息を呑んだ。

無理だとはわかっていても、
伝えなければ後悔する。

今日までのモヤモヤは、このためだったのだ。
こんにち

踏ん切りをつける時なの。

これが、さいじ。

彼も私も冷たい身体なのに、胸の辺りはやけに熱い。

彼の腕からそつと抜け出した。

「どつした？」

見つけたときの私の鼓動といたら、説明できるものではなかったのに。
彼はもう冷静さを取り戻して。
なぜか、悔しい。

相棒の一言に呼び起こされた衝動で、ここまで来た。
よく持ちこたえたと思う。

ぎゅうと力強く拳を握って、息を吸った。

「すっ……」「いつ……」

…あ。

「重なっちゃまったな……。おまえが先に言えよ」

『先に言えよ』

そんな仕切り直した後には言えるほど、メンタルが強いわけじゃなくて。

「先、お願い……」

「あ？」

工藤君は拍子抜けしたような顔に一瞬変わったけど、また真剣な表情に戻った。

「家、とりあえず入れ」

そつえば、雨に濡れていた。

私は横に首を振った。ここで言いたいから。

泣いてもごまかせるから。

雨の中なら、隠してくれるから。

言葉にまでベールをかける必要はなくなるでしょう？

「みやの？」

そんな目で覗き込まれたら、もう我慢なんかできない。

「好きなの、愛してるの」

ただ一言、凍りそうな唇をそう動かした。

『志保も恋のひとつやふたつしなさいよ』

お姉ちゃん、私、したよ。

そして、伝えた。

私なんか愛しているのかもしれないけれど、それでも好きだから。愛してるから。

すぐに瞼を綴じた。

終わった、これで。

守り続けた想いも、すべて。

頬に雨とは違う何か伝ったために、涙が流れたことを知った。
一粒だけの涙だった。

「っ…！」

途端に腕を引かれ、

再び彼の胸中に。

驚いて彼を見上げれば、
ふっと唇が奪われた。

「…工藤…くん…？」

「宮野。俺、宮野が……宮野志保が好きなんだ」

今までもらった言葉の中で、
最高だった。

一番すぎて、
理解できなくて。

認めにくい、幸せすぎる事実で。

認めるのが怖いくらい。

ただ身体は正直だったらしい。

何かが吹っ切れたように、彼を抱きしめ返した。

幸せで、

顔が緩んで、

溢れる涙を止めることはできなかったけど。

宥めるように、彼の抱きすくめる手が、より力強くなった。

工藤君が耳元で囁いた。

「やっと掴まえた」

止めることができるなら（後書き）

突然のカット、編集、そして完結　　大変申し訳なく思います。
それは、これ以上連載しても、全く面白い話ができないと踏んだか
らです。（もともと面白くもなんともないのですが…苦笑）
なのでカットし、編集し、切りのよいと作者が解釈したところで完
結とさせていただきます。
次話を楽しみにしてください。方々には大変申し訳ないです。すみ
ませんでした。

それでは、今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6017m/>

Catch me

2010年12月11日19時50分発行